



自然力(しぜんりょく)の時代

新国 勇

有史以来現在まで、お金が社会を動かす時代、すなわち経済力が世界を支配する時代が続いています。しかし、環境破壊が進み、持続可能な社会が目標とされ、地球の温暖化や生物多様性の消失という決定的な危機を迎えたいま、いよいよ人間の影響がおよばない自然がもつ強み、自然力というものが力をもつ時代がやってきたという予感がしています。

実は学ぶ会を立ち上げた9年ほど前といまを比べると、ずいぶん変わったと思うことが多々あります。結成当時の会員は4人で、花や鳥やヤナギをみて楽しんでいすこし変わった連中の集まりというのが地元の人の評価でした。それでも、バードウォッチングから草花や落葉の観察会、講演会の開催、いろいろな刊行物の発行、ウェブによる発信などで、少しずつ世間に認知されてきたように思います。講演会や観察会も、年々、参加者が増えていて、会員も70人を超す大所帯となってきました。なにより、地元の人たちの間に、会の名前や活動が浸透してきたように感じます。

今年6月には南会津地方植樹祭緑化功労賞、11月にはみんゆう環境賞を受賞しました。緑化功労賞は自然環境保全の普及・啓発への貢献、みんゆう環

境賞は自然に親しむ活動への顕彰が理由です。そのせいかどうか、各種機関や団体、個人からさまざまな依頼、問い合わせも増えてきました。今年3月、伊南川沿いの建設会社が集まって結成した協議会が主催する勉強会に講師として参加要請を受けました。先月は、県出先機関の某課長が、これから編集するユビソヤナギ分布マップがほしいとやってきました。先週には、某大手企業の幹部6名の訪問を受け、水辺林の保全について意見を求められました。

これらのことは、なにを意味しているのでしょうか。それは自然や環境という問題を避けては通れない時代になってきたということです。すこし前なら、道路をつくるのも堤防や水路を改修するのも、住民の安心安全と便利な生活の確保という名目のもとにできないことはありませんでした。しかし、いま、自然力がものをいう時代となって、自然や環境を無視した行為がとれなくなってきたのです。その分、学ぶ会の発言や行動は重みと責任を増してきているともいえます。講演会や観察会、ウェブなども、さまざまな機関、団体、個人から注目されるようになってきました。自然力の時代を迎え、いよいよわたしたちの時代がやってきたと思っています。

Topics

「みんゆう環境賞」「緑化功労賞」をダブル受賞

写真は、福島民友新聞本社で行われた、「みんゆう環境賞」贈呈式の様子。代表と事務局長が出席しました。りっぱな盾と助成金をいただきました。

詳細は7ページをご覧ください。



只見町の新たな文化遺産

柴倉山前平におけるコナラのあがりこ

鈴木 和次郎（森林総合研究所・只見の自然に学ぶ会顧問）

只見の自然を学ぶ会の会報で、鉾山跡付近にナラのあがりこがあると知った時、それはおそらく鉾山の事業に関係するもので、比較的新しいものだと考えた。あがりこの数もさほど多くないと聞かされたので、最初は調査するまでもないかなと考えたが、やはりナラのあがりこには魅力があった。昨年秋と今年（2009年）の積雪期の2度にわたる調査を行う中で、このあがりこ集団が規模も大きく、歴史も古く、地域住民の生活と密接に関係していることがわかってきた。ここでは、今回の調査で明らかになってきたナラのあがりこ林について、中間的な報告をする。

奇木と落とし穴

只見の柴倉山山麓、鉾山跡の上部に広がる“前平（まえでえら）”と呼ばれる台地の上に、その不思議な樹形の樹木群がある（写真1・2）。地際から3～4mの高さで多数の幹を出す直径が最大で1m以上もある巨木集団である（写真3）。この巨木の樹種名はコナラである。コナラは各種の樹木図鑑などでは直径が60～80cmほどになる落葉性の高木と記されているが、ここのコナラは、それをはるかに超えるサイズである。もっとも、コナラは日本の農用林、薪炭林を代表する樹種で、短い周期で伐採が繰り返されることから、大きなサイズのものを見ることは稀である。実際、年を食ったコナラでは、1mを超えるサイズも無いではない。

さて、この柴倉山山麓の奇妙な樹形のコナラはどのようにして生まれたのだろうか？ 実は、自然に

形成されたものではありません。人の手が加わってできたと言うことが判って来ました。この不思議な形をしたコナラが見られる森林は、近くの黒沢集落の共同山（共有林）で、古くから、集落の人たちが、薪の採取や炭焼

きのために利用してきた歴史があります。実際、その痕跡をこの林に見ることができます。この林は、ユキツバキが林床を覆っているのですが、そこに直径1～2mほどの穴が無数にあります（写真4）。これは「かじこ焼き」と呼ばれる炭焼きの跡です。「かじこ焼き」、別名「かじ（鍛冶）焼き」は、炭焼き窯を作らない初歩的な炭焼きの形態で、地面に穴を掘り、そこに薪を入れ、火をつけて土をかぶせると言う伏焼きの一形態で、主に自家用炭を焼くための小規模製炭法で、近世以前、日本各地で広く行われていたものです（写真5）。ちなみに、かじ焼きのかじは、鍛冶のことと思われ、鍛冶屋で使われた

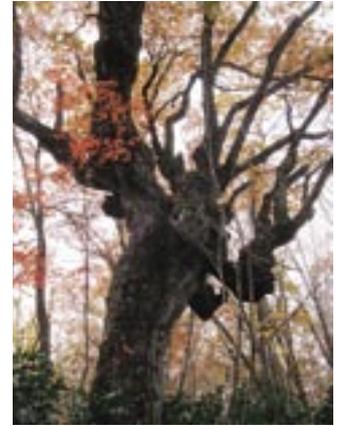


写真3：直径が1mもあるコナラの巨木。3m付近で枝分かれをしている



写真1：柴倉山山麓、鉾山跡上の前平にコナラのあがりこ群がある



写真2：黒沢集落の共同山にあるコナラの巨木群



写真4：林床には無数の穴ぼこ



写真5：かじこ焼きの風景（新国氏提供）

柔らかい炭の製造に適していたものと思われる。かじ焼きは、只見地域では、ごく最近まで行われ、里山に立ち上る炭焼きの煙は、晩秋の風物詩だったのではないのでしょうか。黒沢の共同山では、かじこ焼きは、40年ほど前まで行われていたものと思われます。それは、コナラのあがりこ群の間に生育している様々な樹種の小形木の樹齢から推察されました。

あがりこ林の構造

さて、「コナラのあがりこ」だが、その実態は、どのようなものなのであろうか？

あがりこ型樹形のコナラは、ホオノキやアオダモ、コシアブラなどの落葉広葉樹の小形木からなる二次林内に、ぽつぽつと存在する。その密度は、ヘクタール当たり50～100本といったところである。サイズは、胸高直径で60～120cmといったところで、特徴的なのは、根元から3～4mの場所で、枝分かれし、さらに、それぞれの枝がその先1mほどの高さで細かく枝分かれをしていることである。また、さらにその上で分枝する場合もある。まさしく箒をひっくり返したような樹形が見られる(写真6)。このような樹形の樹木は、コナラが圧倒的に多いが、中にはミズナラやクリなども見られる(写真7)。全てブナ科の樹木であるというのも面白い。このような樹形は、ブナの「あがりこ」に代表される樹形で、「あがりこ」と呼ばれ、台伐り萌芽の結果生み出される樹形と言われている。「あがりこ」は、地際から萌芽幹(子供の幹、あるいは芽)が発生するのではなく、幹の上部、すなわち上がった場所から萌芽幹が発生するところから名づけられたものと思われる。ちなみに、只見地域には、部分的ではあるが、ブナのあがりこも存在している(写真8)。

あがりこは、どのようにして生まれたのか？

では、具体的にコナラのあがりこ型樹形は、どのようにして生まれたのでしょうか？「あがりこ」といえばブナですが、これは多雪地帯における雪上伐採とそこから発生する萌芽幹を育て、それを繰り返し伐採し、春木(薪)として利用する。その利用形態が独特の「あがりこ」型樹形を生み出してきた。では、コナラの場合は、どうか？コナラの場合も、やはり同じ雪上伐採と萌芽再生を活用した薪材生産がその背景としてあったとみられる。ただし、コナラとブナでは幾分違いが見られるように思われる。ブナの萌芽性は、比較的地上より高い場所でも発生する。ただし、この場合でも幹サイズが大きくなると発生しづらくなると言われている。また、萌芽幹が順調に成長するためには、養分が必要となるため、通常は発生した数本の萌芽幹のうち、少なくとも1本は残して伐採利用するというのが一般的である。残した幹は、台伐り位置から発生した新たな萌芽幹が成長した後に伐採することになる。

一方、コナラの場合、萌芽性が高いため、地上部を全て伐採しても、萌芽幹は発生成長する(写真9)。ただし、台伐り位置が高くなると萌芽力が極端に落ちるとされていた。こうした萌芽特性からコナラについては、台伐り萌芽更新は難しく、あがりこ型樹形は形成されないと考えられてきた。したがって、当初、鉾山跡の上の台地で、あがりこ型樹形のナラがあると聞いた時、それはミズナラと思い込んでしまった。ミズナラのあがりこについては、鳥取の大山山麓でも見たことがあり、その可能性を確信していたためである。実際に昨年(2009年)秋に現地調査を行った際も、当初はそれがミズナラであると信じて疑わなかった。ところが、地面



写真6：箒をひっくり返したようなコナラのあがりこ



写真7：クリのあがりこ



写真8：ブナのあがりこ。ただし、伐採後放置



写真9：コナラの薪炭林施業。地際で伐採更新させる

に落ちている落ち葉はほとんどがコナラで、成長錐で幹の採取をしても、極めて硬いことがわかり、確信が揺らいだ。そして、よく観察をしてみると、明らかにコナラである。この事実は、まったく意外なものであった。つまり、コナラは台伐り萌芽が難しく、あがりこを形成しないと言う常識が破れたのである。では、どうして、コナラのあがりこが形成されたのであろうか？ それは、やはり多雪という環境がなせる技と考えざるを得ないだろう。すなわち、積雪はコナラをして、台伐り位置を地表面と勘違いさせる効果である。奇抜な発想ではあるが、十分ありうるように思われる。積雪は台伐り付近の幹の乾燥を防ぐばかりか、材部の枯れ腐朽すらも妨げる。これは発生した萌芽芽の成長にとっては極めて好適である。

コナラで伐採位置が上がっていく訳は？

それにしても、コナラにとって、地際から高い位置での萌芽再生は不利であることには違いがない。そこで、取られる方法が、ブナに見られる萌芽幹の一部保残法である。一部の萌芽幹を残すことで、伐採位置から新たに発生した萌芽枝に養分を供給することが可能となり、その生残率を高める効果が期待できる。こうした技術は、全くの試行錯誤の結果生み出された部落特有の技術なのか、それとも普及伝播してきた技術なのかは定かでない。ただし、こうした利用法がこの地域に広がりを持たないことから、やはり試行錯誤の結果と見るのが妥当ではないだろうか？

もう一つの問題が、伐採時の幹サイズである。先に述べたようにコナラは萌芽性が極めて高い。ただし、それは幹のサイズが小さい時である。サイズが大きくなるにしたがって萌芽性は落ちる。そこで、台伐り位置のサイズを下げるとすると、より高い位置で伐採を行わなければならない。そうした結果が台伐り位置の上昇である。一番下の台伐り位置

は、おそらく積雪深によって決まっただろう。それにしても、第1段目の台伐り位置が3～4mと積雪深に比べ高いのが気になる(写真10)。確かに近年、積雪が減少傾向にあるとはいうものの、雪の締まった春木伐りの時期に、この積雪深は考えづらい。結局は、萌芽性を考えて、最も低い枝付近での伐採から始まったと考えるのが妥当だと思われる。

ブナの場合は、ほぼ一定の場所で、台伐り萌芽が繰り返し行われているが、コナラの場合は、台伐り位置が樹木の成長と共に、上昇している。これは、両種の萌芽特性の違いによるものと考えられる。それでは、黒沢共同山の場合、このような森林管理がどの時代に始まり、どの周期で伐採が行われ、いつまで続いてきたのだろうか？それを知る手がかりは、成長錐によって採取した幹のコアの解析(写真11)によって、ある程度は知ることができる。それによると、あがりこコナラの元幹の樹齢は、少なく見積もっても170年以上あり、最後の伐採後、萌芽再生した幹の樹齢は40年生と推定された。その元幹の推定樹齢は60年生と推定されることから、およそ20年ごとに伐採が繰り返されてきたことを示している。この20年の周期は、割らずに使える薪のサイズでもあり、また、萌芽再生に適したサイズでもある。こうした薪炭林施業は、40年前に終わりをつげたが、これは燃料革命により、燃料としての木質資源が石油に取って代わった時期に一致する。一方、謎も残る。こうした萌芽更新を利用した森林施業はいつごろから行われるようになったのか？これもまたコアの成長解析の中で明らかになると考えている。すなわち、台伐り時に元幹の肥大成長は極端に減少するからである。

あがりこ型樹形のコナラは、一般のコナラのイメージとは異なり、巨大である。それは、樹齢が170年以上と老齢であると同時に、台伐り萌芽が大きく影響しているものと考えられる。すなわち、台伐り部分で多数の萌芽幹を発生させることから、



写真10：積雪期のコナラあがりこ林。台伐り位置が積雪高よりだいぶ高い



写真11：木に登って成長錐により萌芽幹からコアを採取し、幹齢を推定する調査



写真12：積雪期のコナラあがりこ林。只見の地域的遺産として保存が望まれる

これら萌芽幹を支えるために、発生部分で異常成長を引き起こし、その結果、幹の肥大化、奇形を生み出すものと考えられる。これが台伐り萌芽＝ポラード（あがりこ）の特徴の一つでもある。

コナラのあがりこは、 地域の文化遺産、歴史遺産

コナラのあがりこは、只見のような多雪地帯における雪上伐採と萌芽更新による薪炭林施業によって生み出されたものである。したがって、只見地域の歴史的な森林利用の一形態、歴史的な所産であるとも言える。今日、その利用形態は消滅したが、地域

の歴史と人々の生活を今に伝える貴重な文化遺産といってもよい（写真12）。加えて、コナラのあがりこは、全国的に見ても珍しく、その樹形のユニークさと巨木群は人の目を引き付ける優れた景観でもある。ぜひとも、後世に伝えるべき、地域の価値ある財産である。

最近、ナラ林に広がるナラ枯れが只見川流域に拡大する勢いである。そして、これらコナラもその対象となる可能性が大である。ぜひとも、保護していきたいものである。

現地調査・データ解析は鈴木和次郎・菊池賢（ともに森林総合研究所）

学ぶ会メーリングリストより 会員からの只見自然情報

*ツルボの花

前庭でツルボが花をつけているのを見つけました。花茎をすっとのぼし、先端部に六弁の小さなピンク色の花が密集して咲きます。葉っぱはありません。初秋、道ばたで見かけるユリ科の多年草です。そういえば、裏の畑道にもいっぱい咲いていたことを思い出し、カメラをもって家をでました。でも、1本もなし。30年くらい前、さかんに花の写真を撮っていたころは、ふつうにあったのに！



しかし、よく見れば、道ばたの草が茂っています。荒れた畑も目立ちます。そうか！生える環境がなくなったのかと気がついた次第。すこし前までは、人が道草を刈り、畑もきれいに管理していました。そんなきれいな環境が、ツルボは大好きでした。このような例に、ネジバナ、ヤブカンゾウなどがあります。人と植物との微妙な関係は、興味深いものがあります。

(2010.09.03・勇)

*至福のアマガエル

ムシムシするので、玄関に出たら、羽アリが外灯にいっぱい集まっていた。そのなかに黒いかたまりがあります。よく見たら4匹



のアマガエルでした。アリが身体じゅうについています。そして、目の前にきたアリくんをパクン、パクンと食べていました。おなかはもうはちきれそうです。まさに、ごちそうの海！今が至福の時かも。

(2010.09.12・勇)

*へんなキノコ1

只見町ブナセンターで、10月から秋の実り展が開かれます。いま、その展示品を集めています。きょう、ご紹介するのはそのひとつ。カラカサタケです。唐笠を開いたような端正なキノコ。自宅裏のスギ林のなかに生えていました。高さは25cm。かさはやわらかくてスポンジのようです。林のなかでよく目立っていました。食用だそうです。実物標本は企画展にまわします。



(2010.09.18・勇)

*黒谷川のマムシくん

9月18日～19日、黒谷川の本流で遊んできました。18日の昼過ぎに、先頭を歩いていた友だちが流れの脇のブナの倒木を越えようとして、



悲鳴をあげました。目の前でマムシくんが、とぐろをまいていたのです。そして翌日、朝10時ころ、まったく同じ場所で、まったく同じ格好のマムシくんを発見。

その時の写真です。

撮影のため近づいてもビクともせず、まったく悠然たるものでした。

(2010.09.21・クマ)

*只見湖の白鳥

今年の春、北帰行できなかったオハクチョウが只見湖にいます。イヌワシ、キツネ、テンという天敵もいま



すが、無事でいてほっとしました。スーパー猛暑の只見で、食べ物を食いつないで1年目を迎えるのです。もう、ホシハジロ、キンクロハジロ、ヒドリガモなどの冬鳥もたくさん来ています。あと1カ月もすれば、このオオハクチョウの家族がやってきます。1年ぶりの再会です。家族のきずながつよい鳥ですから、コーコーと鳴き交わしてよろこぶことでしょう。対面の瞬間を見てみたいものです。

(2010.10.05・勇)

*マツタケ豊作

今年の只見のマツタケは、30年ぶりの大豊作だそうです。きょう某集落の山から採れたマツタケ



は、直径21cm、高さ28cmもありました。みなさんに眼の保養だけさせましょう。モデルは八重歯がかわいいAKEMIちゃんでした。

(2010.10.24・勇)

*癒しの森で除伐

おととい日曜日に、まだ行っていなかった癒しの森を金山町横田側の入り口から登ったら、只見町側の森が里山のように除伐されていました。「癒しの森」でこのような除伐をしているのでしょうか？ 驚愕です。



天気も上々るんるん気分です。

倒木があちこちにあり年季の入った森に浸って歩いたら、下草が刈られて全くなくなり、あげく太い木だけ残してあとは全部伐り倒してありました。どこが道なのかも分からないぐらいで、結局、松坂峠への道が分からず、新しくつくってあった布沢の森林の分校の裏に出る道に迷い込んでしまいました。

どうやらこの道をつくったときに、里の人工林とする

除伐をそのまま施業したようです。「森林環境交付金事業」という表示が誇らしげに布沢側の入り口にありました。……なんてこった。奥山で「天然林」を売り物にしているブナ林やミズナラ林を里山の人工林のように小径木まで除伐するというのは暴挙でしょう。「自然首都」なんて聞いてあきれます。

伐倒した木はそのまま残されて地面が見えません。これでは春になっても下草が芽生えることができません。来春はきっと、「癒しの森」の天然林の一角にサバンナのような場所が出現することでしょう。そこは、ブナの森の只見町です。……悲しいです。

(2010.11.09・ゆた3)

*黒い生き物

先月24～25日、南会津サポートクラブ主催のサイクリングの途中で黒い生き物を見ました。森林の分校で食事後、坂田を下り亀岡方面に向かう伊南川沿いの道すがら、林道日宮沢線の入り口をすぎたあたりでした。川の中州を横切る黒い生き物！ 幸いにして距離もあり、こちらは川の側道ともいえる高い位置からの観察が出来たのです。カメラを首からぶら下げていたので 夢中でシャッターを。なんとって、熊さんは初めての遭遇です。



(2010.11.11・kurikin)

*へんなきのこ2

いつか見たいというきのこに会ってきたずや。サンコダケです。黒谷入の栗林のなかに出ていたずや。タコの足がくつついたような奇妙な形。足はスポンジのようにすかすか。そして、えれー臭えー！ シッコが腐ったような悪臭じゃ。んじゃども、こういうキャラ好きだな～。



(2010.11.13・勇)

*滝湖の白鳥

天気の良さに誘われて滝湖に行ってきました。先日は7羽しか見つけられませんでした



20数羽と多くなっていました。強力な鳥インフルエンザが巷では騒がれていますが、滝湖の白鳥は無事に飛び立ってほしいと願います。

(2010.12.20・弘)

只見にトキがやってきた!

昨年、2009年4月30日に只見町黒谷にトキが飛来しました。佐渡トキ保護センター（新潟県佐渡市）から放たれた試験放鳥の個体（NO.3）です。

4月30日から5月5日にかけて新国代表が連日仕事を放り投げて撮影した写真を紹介します。



写真はいずれも只見町黒谷一ノ坪の水田で
(新国勇撮影)

◆ トピックス

「緑化功労賞」受賞 2010年6月9日

「緑化功労賞」は、福島県南会津林業事務所が毎年、郡内町村を巡回し、団体や個人を表彰しているものです。「只見の自然から学んだ成果を、町の宝として、多くの方々に普及・啓発を行ってきた功績が顕著である」という推薦理由です。私たちの活動が公に認められたものと解釈したいと思います。

「みんゆう環境賞」受賞 2010年11月15日

「みんゆう環境賞」は、福島民友新聞社が行っている、自然環境を守り、自然に親しむ活動に取り組んでいる団体を顕彰、支援するための助成制度。テーマは『伊南川流域における希少種ユビソヤナギの自生地と保全』、助成金額は25万円です。2006年から3年間にわたり、伊南川流域70kmを調査した結果、2449本のユビソヤナギが確認できました。そのデータとユビソヤナギ自生地マップを合わせて刊行するものです。世界最大規模のユビソヤナギの自生地をもつ只見川流域で、民間団体がこのような報告書を出すことは大きな意義があります。

◆ 活動予定

* 水鳥観察会

日時／2011年1月15日（土）9:00～12:00

場所／滝湖と只見湖

※環境省自然環境局が主催するガンカモ類の生息調査を兼ねて行っている毎年恒例の水鳥観察会。

* 雪まつりで遊ぼう

2011年2月11日～12日開催の「只見ふるさとの雪まつり」に合わせて、雪のフィールドへ出かけよう。

* 第2回 バードカービング教室

日時／2011年4月2日（土）13:30～16:00

4月3日（日）9:00～16:00

場所／ただみブナと川のミュージアム

講師／遠藤 勇先生

※好評だった今年8月のバードカービング教室の第2弾です。材料費と受講料が必要です。

※詳細は後日メーリングリスト、ホームページで。

予 告

来年は学ぶ会創立10周年!

キノコの写真家として有名な糞土師こと伊沢正名さんの講演会をはじめ、記念事業を計画
中（2011年6月の予定）。

◆ 活動報告

- *第3回 只見の自然に学ぼう会 [講演会]「只見の植物と巨木 ―奥深い自然に育まれた草木たち―」(2009年5月9日 13:30～15:30 / 只見地区センター視聴覚室 / 講師・刈屋 寿氏 / 30名参加)
- *寄岩バードウォッチングと植物観察会 (2009年5月10日 / 寄岩 (バードウォッチング) 12名参加、蒲生 (植物観察会) 10名参加)
- *21年度総会と懇親会 (2009年6月6日 18:00～21:00 / 青少年旅行村バーベキューハウス / 参加: 総会22名、懇親会24名) 総会終了後にバーベキューなど盛りだくさんの料理を囲み懇親会を開きました。オカリナの演奏や歌も披露されました。
- *吉尾峠探訪 ((2009年6月7日 9:00～ / 森林の分校ふざわ集合・解散 / 参加: 13名+ガイド) 地元ガイド、刈屋晃吉さんと布沢から吉尾峠を越え昭和村野尻まで歩きました。
- *「うつくしま自然展」の展示 (2009年7月5日 / 福島県立博物館 / 5名参加) 福島県立博物館で行われた「うつくしま自然展」(7月7日～9月4日開催)に、只見の自然をテーマにパネル等を展示しました。
- *虫の観察会の予定を変更し虫談義 (2009年8月15日 / 民宿ふるさと / 11名参加) 雨のため虫の観察会は中止とし、三田村先生を囲み夜遅くまで虫談義となりました。
- *星空観察会 (2009年9月11日 19:30～ / 只見考古館 / 約40名) 古川先生を講師にお招きした星空観察会。目玉は地球大接近の木星でした。
- *第4回 只見の自然に学ぼう会 [講演会] (2009年9月27日 18:30～ / 青少年旅行村・古民家 / 講師・三田村敏正氏 / 22名参加)
※写真は学ぼう会の案内ポスター
- *落葉観察会～ブナ林を歩こう (11月1日 9:00～ / 小塩沢の仕事道 / 3名参加)
- *忘年会 (2009年12月19日 18:30～ / 会員宅 / 19名参加)
- *水鳥観察会 (ガンカモ類生息調査) (2010年1月9日 9:30～12:20 / 滝湖と只見湖 / 7名参加)
- *「黒沢アガリコの森」観察会 (2010年2月13日



13:00～15:30 / 20名参加) 只見の雪まつりにあわせてアガリコの森までスノーハイク。

- *第5回 只見の自然に学ぼう会 [講演会]「オオヤマレンゲの生態と遺伝」森林総合研究所・菊地 賢氏 / 「アガリコの生態学」森林総合研究所・鈴木和次郎氏 (2010年3月9日 19:00～21:00 / 只見地区センター / 約50名参加)
- *ユビソヤナギと春の花観察会 (2010年4月18日 9:00～ / 伊南川亀岡周辺 / 10名参加)
- *「禮次郎ワールド」で里山散策 (2010年4月25日 10:00～ / 南会津町・月田農園 / 9名参加) 月田農園で里山散策と薪ストーブを囲みバーベキュー。
- *寄岩バードウォッチング (2010年5月23日 8:00～ / 寄岩林道 / 18名参加) プナセンターと協賛。
- *第6回 只見の自然に学ぼう会 [講演会]「奥会津の民俗を探る―雪国の伝承と技―」(2010年6月6日 19:00～21:00 / 講師・栃木県立博物館名誉学芸員 柏村祐司氏 / 只見地区センター / 約30名参加)
- *22年度総会と懇親会 (2010年6月26日 18:00～21:00 / 青少年旅行村バーベキューハウス / 参加: 総会18名、懇親会19名)
- *バードカービング教室 (2010年8月20日～22日 / ただみブナと川ミュージアム) バードカービング作家の遠藤勇さんのバードカービング教室。バードカービング作品展も同時開催。
※写真は、遠藤勇さんの作品と教室のようす。



- ※定例会などの活動報告を省略しました。
- ※詳しくは、学ぼう会ホームページの活動記録 (<http://www.fukosya.com/manabukai/chronicle/chronicle10.htm>) をご覧ください。

■編集室から

2009年3月以来の久々の発行、これでは季刊とは言えませんね。これを復刊号として、来年は4回発行します(たぶん…がんばります)。

タイトルの写真は、昆虫写真家、今井初太郎さん撮影のミネトワダカワゲラです。(楓)